



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 1 月 4 日 (土)

発行 館長 加藤 智 一

イチマル

新年明けましておめでとうございます。
旧年中は私ども山形県産業科学館に対しまして、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
本年も倍旧のご支援ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて、新年最初の話は、1月4日(土)の朝日新聞、およびwithnews 2022/12/16に掲載された、我が山形県「アルアル」から。かなり有名な話なので、知っている人は知っている。今から20年以上前の事です、私が県庁の、当時「社会教育課」あるいは「教育やまがた振興課」という部署に勤めていた時のこと、某民放テレビ局の「探偵〇〇〇スクープ」だったかな?から一本の電話がありました。「山形県では①のことをイチマルと呼ぶそうですが本当ですか?」何を当たり前の事言っているのだ!!と考える暇もなく、この事について詳しい人を教えて欲しいとのことでしたので、その時は適当に思いつくまま、県立博物館を紹介してしまったのですが、良かったのだろうか。という思い出話は置いて、なんと記事によると、2021年発売の国語辞典には、「山形県では、『いちまる』と掲載されているようで、「イチマルって山形県だけだったのか!?!」とあらためて驚かされました。跡見学園女子大学の加藤大鶴先生によると、「学校教育から広がったことは確か」「①、(1)などの記号に子どもが初めて接するのは学校。旧山形師範学校を卒業して県内で小学校の先生になった人たちが広めていった」「山形には、庄内、最上、村山、置賜それぞれに独特の地域間の方言差が存在するのに、イチマルが共通して使われているのは、学校制度が広まっていることの一つの証明になるで



しょう」とのこと。山形県で採用された先生は、基本的に県外へ移動することはないので、県内では当たり前前にイチマルなのに、県外に出ると変な顔されることも説明が付きまします。となると、最初にイチマルと仰いだして、定着させた人は誰なんだということが、気になるところなのですが、よっぽど影響力の強い先生だったのでしょうか。

山形県経済同友会 2025 年基調方針

新年を迎えるにあたり、今年も山形県経済同友会では基調方針を公表しています。

《テーマ》 「山形愛を未来につなげよう」
《基調方針》

- ① 環境・人づくりにより、多様な人材が活躍する山形へ
- ② 環境保全とカーボンニュートラルに向けた取り組みの促進
- ③ 地域のサステナビリティを支える産業の振興

山形県経済同友会は、高い志をもつ経済人で構成された政策提言集団として、利害をはなれた立場での自由闊達な論議と相互啓発を行い、理想実現のために発言し行動する団体です。時代の潮流を見極めた創造的経営により、経済社会の発展に貢献するとともに、地域の構造的課題にも主体的に取り組み、県勢の発展と、ふるさとの美しい自然、縄文を源とする文化を愛し、それを守り育てるとともに、精神性の高い、潤いのある地域社会づくりに向けて積極的に活動を行ってまいります(山形テレビの「提言の広場」とか)。

山形県産業科学館には、現在県内 23 市町村に立地する 38 の企業・団体から展示協力いただいております、自社製品の紹介だけでなく、遊びながら原理や必要性を理解できる工夫が随所になされており、将来を担う子どもたちにも、地元の産業に興味関心を持ってもらえる施設となっています。

少子高齢化が深刻な時代を迎え、山形の経済的発展を願うならば、大事なものは人材育成であり、温暖化対策であり、持続可能な社会の実現であることはもはや疑う余地はありません。経済人は勿論ですが、県民一丸となって真剣に取り組んでいかなければならない急務であると思っております。